6/12/2012

S. Ashina

前期：キリスト教と政治思想

オリエンテーション

１．イデオロギーとユートピア

１－１：リクール１
１－２：マルクスとマルクス主義
１－３：黙示的終末論の系譜
１－４：ティリッヒ１
１－５：ティリッヒ２
１－６：リクール２
１－７：知恵思想の視点から　6/19
１－８：パウロとローマ帝国　6/26

２．キリスト教社会主義

２－１：キリスト教社会主義の―イギリス・アメリカ・日本―　7/3
２－２：宗教社会主義―ティリッヒ―　7/10
２－３：賀川豊彦のキリスト教社会主義　7/17
２－４：解放の神学　7/24

Exkurs

キリスト教と仏教１
キリスト教と仏教２

＜前回＞リクール１

１．問題：「イデオロギーとユートピア」という問題設定において、キリスト教と政治思想との関わりを論じる。リクールとティリッヒの議論を参照する。

２．近代はいかなる時代か

・近代化＝世俗化：信仰がイデオロギーとユートピアへと二者択一的に分解する過程
・宗教批判とは何か。宗教言語の指示機能の否定＝非実在論
・神話：非科学的（幼稚な迷信）→ユートピア
　　非歴史的（歪曲・虚偽）→イデオロギー
　↓
　言語論・象徴論、社会的構想力という視点で近代の宗教状況を論じる。

３．Paul Ricoeur, *Lectures on Ideology and Utopia*（ed. by George H. Taylor）,Columbis University Press, 1986.

５．リクールの戦略

・掘り下げる、歪曲・病的　→　正統化　→　自己同一性（構想力・存在）
　　行為のシンボル的構造
　　マルクス　　ウェーバー　　ギアーツ
・イデオロギーに対するユートピアの先行性・優位
・社会的構想力：1970 年代の中頃のもう一つの研究テーマ、隠喩・譬えの問題。
　言語・構想力から人間へ。個人と共同体、構想力から倫理へ
・Paul Ricoeur," Listening to the Parables of Jesus." in: Charles E.Reagan and David Stewart（eds.）, *The Philosophy of Paul Ricoeur*, Beacon Press, 1978.

＜ティリッヒ２＞

12．議論の要点は、次のようになる。

①ユートピアは人間存在自体に根ざすものであり、人間が人間であり続けるかぎり、消滅することはない。人間はユートピアを必要とし、ユートピアは、構想力を通して、常に新たな形態を獲得するのである。

②ユートピアは両義的である。真理であると同時に、非真理である。これは、次章に見る、ユートピア主義とユートピアの精神との区別という議論へと展開される。

③ユートピアの否定面、つまりユートピア主義は克服されねばならない。

14．ユートピアの超越＝ユートピア自体の根拠から発する、ユートピアの否定性の克服。

「根源的に越えてゆくとは、水平的なもの、常に進展するものの線上でなされるのではなく、垂直線上において越えてゆくことを意味している。」（Tillich, 1951, 573）

15．ユートピアの超越を人間が所有し自由に操作できる→ユートピア主義

16．宗教自体に内在する偶像化（自己絶対化）の可能性。

17．「限界」（否定性）を内在する精神性。批判的契機を自らの外部に持つこと。

キリスト教によってのユダヤ教の本質的な意義。

cf. レヴィナス

18．ユートピアの超越のメルクマール：歴史における自己否定的なものの出現、自己の偶像化に対する否定を内に組み込んだものの現実化。

神の自己否定（弱さ）の意味。

19．キリストの十字架の象徴。

20．ユートピアの精神：ユートピアの否定性を克服する現実への志向性。

「重要なのは、ユートピアを克服するユートピアの精神なのである。」（Tillich,1951b,.578）

神の国をその二面性（人間の歴史的現実性に対する内在と超越）において、断片的に先取りする。ユートピアの存在論的な源泉であるとともに、その歪曲と歪曲の克服という二つの事柄の共通の源泉として機能する。

(6)「カイロスの気づき(awareness)は、ヴィジョンの事柄である。それは、心理学的あるいは社会学的用語によって与えられ得る分析や計算の対象ではない。それは、距離を置いた観察の事柄ではなく、巻き込まれた経験の事柄なのである。しかしながら、このことは、観察と分析が排除されることを意味しない。観察や分析は、ヴィジョンを客観化し、明確で豊かなものとすることに仕えるのである。」（Tillich,1963, 370-371）

1965: The Right to Hope, in: *Theology of Peace* (ed., Ronald H. Stone), John Knox Press, 1990, pp.182-190.

１ ― ６ ： リクール２

（1）イデオロギーの三つの次元

１．We recognized that at this stage the concept of ideology was systematic distortion, and we saw that in order to approach this first concept, we had to take into account a concept of interest --- class interest --- apply an attitude of suspicion, and proceed to a causal dismantlement of these distortions. Here the paradigmatic model was the relation between superstructure and infrastructure.

We were led to ask what is implied in the notions of ruling class and ruling idea. Our answer was the problem of authority. This uncovered the second concept of ideology, ideology as

legitimation. Here we introduced discussion of Max Weber,...

the gap within a group between the leader's claim to authority and the members' belief in this authority.

the conceptual framework was not causality but motivation（254）

It is to build a third concept of ideology as integration of identity that we finally resort to Geertz. At this stage, we reach the level of symbolization, something that can be distorted and something within which lies the process of legitimation.

The Interpretation of Cultures（254-255）

２．・現実の転倒としてのイデオロギー

・正統化としてのイデオロギー

正統化の主張と信仰

・象徴的統合化、自己同一性としてのイデオロギー

３．symbolic action（Kenneth Burke）

not an action which we undertake but one which we replace by signs

I prefer to speak of action as symbolically mediated.（256）

the possibility of comparing an ideology with the rhetorical devices of discourse

an interest is "expressed by" something else

the integrative function of ideology, the function of preserving an identity,

no group and no individual are possible without this integrative function （258）

the correlation between ideology and rhetoric（258）

ideology is not the distortion of communication but the rhetoric of basic communication.（259）

４．the concept of integration is a presupposition of the two other main concepts of ideology --- legitimation and distortion --- but actually functions ideologically by means of these two other factors.（265）

it has a conservative function in both the good and the bad senses of that word. Ideology preserves identity, but it also wants to conserve that exists and is the more negative meaning of the term .... Ideology operates at the turning point between the integrative function and resistance.（266）

象徴体系によって行動は媒介される、行動は意味の了解を前提とする。世界を理解し行動するには意味世界をイメージにもたらす象徴体系を

現実（集団と個人の）を保持するイメージ、社会的行動を律する秩序形式を保持する構想力

↓

保守的効能

（２）ユートピアの諸次元

・Paul Ricoeur, Die Hermeneutik der Sakularisierung. Glaube, Ideologie, Utopie, in: *Kerygma und Mythos VI-9. Zum Problem der Sakularisierung*. Hamburg, 1977.

５．病理としてのユートピア

「宗教はアヘンである。」

別の現実を夢見ることによって実践を回避する。

６．批判としてのユートピア
正統化の要求と信頼とのギャップを暴露する。
７．可能性の領域を開くユートピア
歴史的現実とは異なる現実（本来性？）を描き共有する能力
↓
「異端的」と呼ばれた民衆運動は何だったのか
キリスト教史の根本問題

（３）イデオロギーとユートピアの弁証法

８．生の弁証法：自己同一性と自己変化　→　成長する、あるいは生きている
ヘーゲルあるいはドイツ観念論からティリッヒへ
次元の生成に限定されない生の生成一般を記述するために、ティリッヒはヘーゲル（若きヘーゲル）の生の概念に依拠しつつ議論を展開する。すなわち、生の生成は、自己同一、自己変化、自己帰還の三つの要素によって弁証法的に構成され、このような三要素から構成された生は、自己統一、自己創造、自己超越の三つの機能（運動）において自らを生成すると考えられる(ST.3, pp.30-32)。生は、とくに個的生命体において明瞭に見られるように、一定の形態（中心を有すること）を維持しつつ時間経過の中で変化してゆく。しかもその際に自己同一性は繰り返し新たに再構成される。変化のない自己同一も自己帰還しない自己変化も、生きた生命体にとっては死を意味する。こうした生の諸要素によって成り立つ構造体から､自己統一と自己創造と自己超越の三つの生の運動が生じてくるのである。精神の次元が現実化した人間の生に即して言えば、生は自らの世界を有する自己としての統一性を保持しつつ、文化的な営みを通して自己創造を行い、しかもその有限な生の限界を超えてより高いものへと進もうとする（昇華)。こうして、自己統一に関わる道徳、自己創造としての文化、そして自己超越としての宗教は、精神の次元における生の生成運動として統一的に捉えられることになるのである。
ティリッヒの生をめぐる議論
・生の現象学　→　生の両義性（本質と実存の混合）
→　生の次元論（多次元的統一体としての生）・構造
→　生の弁証法・動態
９．信仰は究極的にはイデオロギーかユートピアかの二分法の拒否である。
自己同一性は信仰に基づく
「あなたの神である主を愛する」→「あなた」と「神」の相関性としての信仰
信仰は、自己同一性に形を与えそれを保持する、と同時に、自己同一性の転換を可能にする。
「この世」に根を下ろすと同時に「この世」を根こぎにする
↓
終末論あるいは希望の弁証法
すでに、そしていまだ
↓
10. 象徴・言語・構想力という視点から理論を再構築すること。
時間論・終末論とは別の理論構成の可能性､そしてそれを再度時間論と統合すること。
キリスト（形態）：歴史・時の中心＋ロゴス（動態と構造）